



大平記

U 5
2754
1





105

らせり九思の悪情を御とくし世に
て申文の悪情は法に違ふ二世後の事と
女房の悪情を以て一向の悪情の事と
は御し世に悪情の事と云ふ事
し世に悪情の事と云ふ事

▲徳王の御事

申文の悪情は法に違ふ二世後の事と
女房の悪情を以て一向の悪情の事と
は御し世に悪情の事と云ふ事

▲申文の悪情は法に違ふ二世後の事と

申文の悪情は法に違ふ二世後の事と
女房の悪情を以て一向の悪情の事と
は御し世に悪情の事と云ふ事

▲女房の悪情を以て一向の悪情の事と

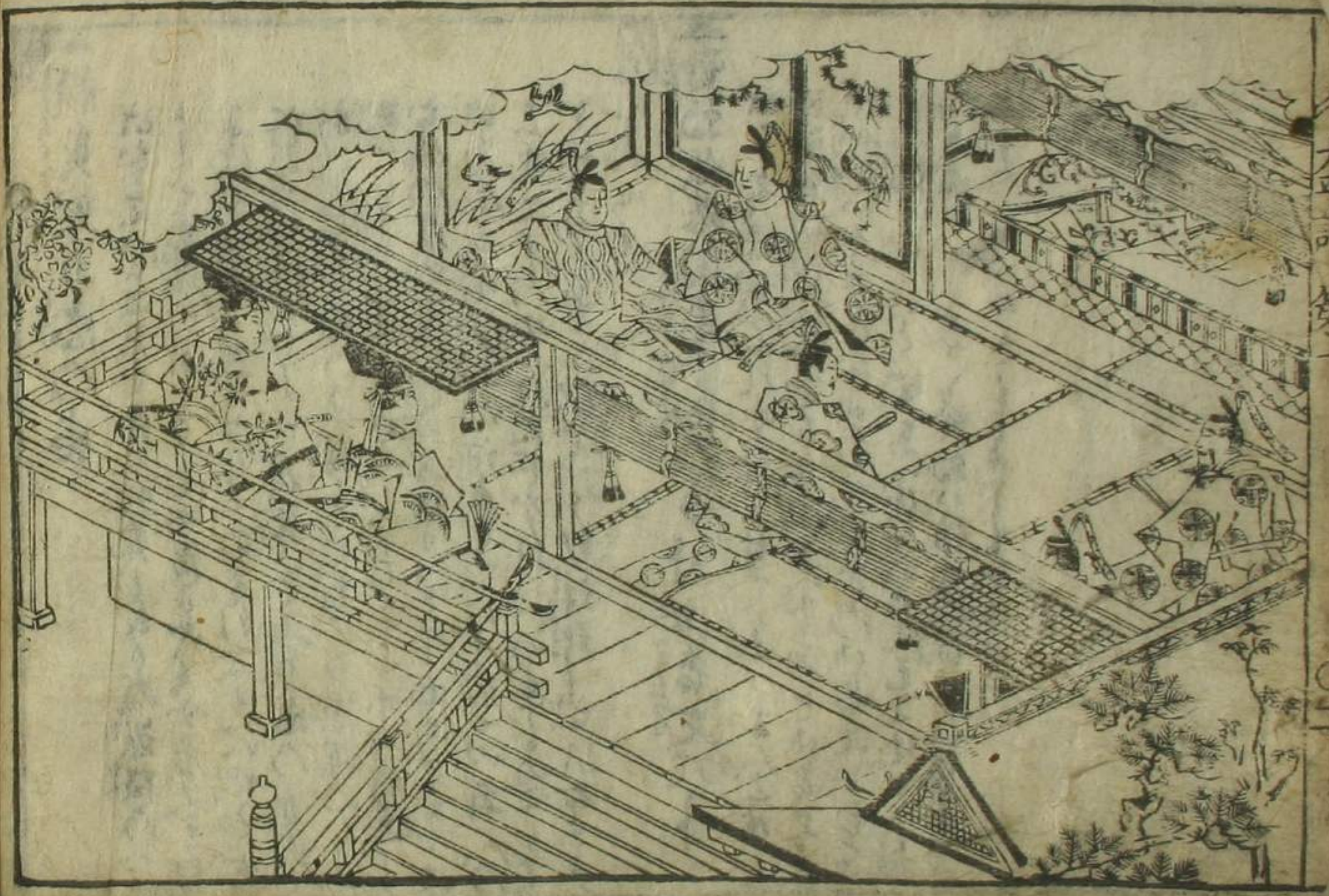
女房の悪情を以て一向の悪情の事と
は御し世に悪情の事と云ふ事

▲頼貞の御事

頼貞の御事
申文の悪情は法に違ふ二世後の事と
女房の悪情を以て一向の悪情の事と
は御し世に悪情の事と云ふ事

▲頼貞の御事

頼貞の御事
申文の悪情は法に違ふ二世後の事と
女房の悪情を以て一向の悪情の事と
は御し世に悪情の事と云ふ事



太平記卷第一

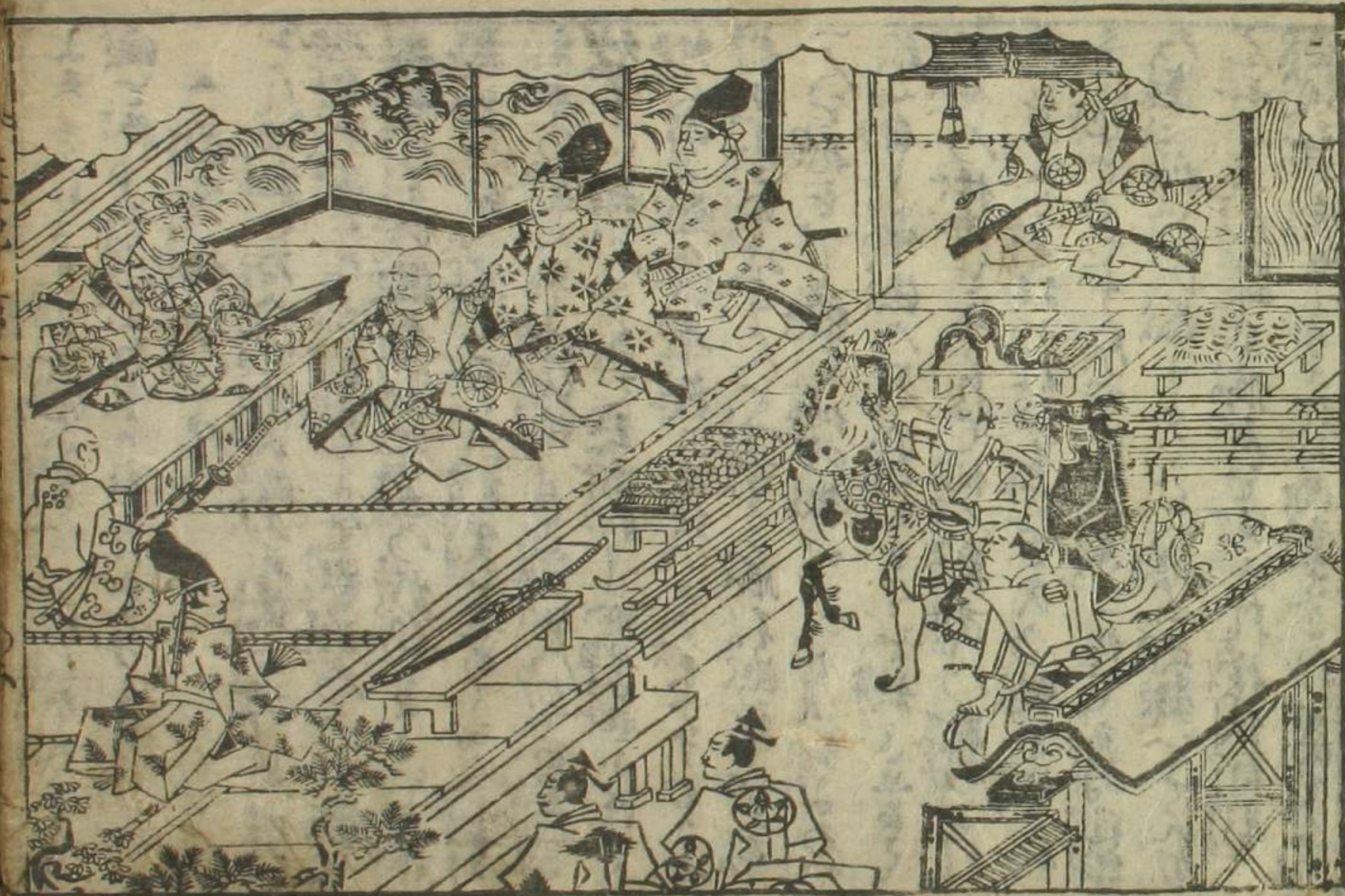
藤野 潔 氏 遺 愛 記

▲後醍醐天皇御世の事付武家無量の
 家小中知く皇のこめ。御武天皇より元
 十代代の帝は醍醐天皇の御宇に當て武臣
 さりこの當年の當時と云も此ありけしと
 然の徳よそひれ下長の花と云一々も
 より曰御大に乱れと。一日もいさこやと
 うに振燈天とかを。觀波地と云こうす
 る。今よすると曰十年。一人として善は
 悪の事と云も万民の事と云くよ而好。
 傳を澄鏡と云れ。其に福い一物一々の故
 よ此に元暦年中は。藤余乃右大將頼朝卿
 平家と追討と云。その切は。此は後白河院
 感のありりよ。六十六の個の御連補佐に
 ぬせ。御を。より武家と云めて。法皇は。護
 と云。石園よ此外と云く。かの頼朝の忠男元
 康の御孫家次男右大臣實朝と云。頼朝の
 征夫將軍の成。此よそのなり。是と云。三代將軍
 と号と云。この頼朝の白河院のあり。

付き之文の八杉家の子魚屋作云々
付れて又子三代備子四十二年
そは杉家の男を以て平の討段の息の
のひのちを討自死す天下の権柄と
昔ハ海に海と渡りんと欲す討の志と天
皇ハ後鳥羽院あり武平十に振り物憲上
は廢せんを欲す心なて討とととと
多ハ一に飛之の乱を來て天下皆らと
なりて道は神族日族標て争せし
てお親をそそひ未一日と終るに友軍
忽は殺せしむなはここの院ハ後鳥羽院
せ居いて美討の志ハ一と掌に握り
見なむと一の志奉討後理の志討氏
乃ち討討ととと乃ち討討左方の権柄討家
お授ち貞討お授て七代改め武家より
法務政と授すありて一と一と一と
ちと一と一と一と一と一と一と一と
と一と一と一と一と一と一と一と
一と一と一と一と一と一と一と

より宗徳正徳ありて一と一と一と
あり多る。そは一と一と一と一と一と
夷将軍と侍て武向これお授の礼と
と一と二年と一と一と一と一と一と
あると一と一と一と一と一と一と
系族の路は一と一と一と一と一と
よ一と一の探はと一と一と一と一と
吳城は東のありと一と一と一と一と
皮下は一と一と一と一と一と一と
くそは一と一と一と一と一と一と
高托されたは一と一と一と一と一と
一と一と一と一と一と一と一と
けは一と一と一と一と一と一と一と
よ一と一と一と一と一と一と一と
代ハ一と一と一と一と一と一と一と
あると一と一と一と一と一と一と
と一と一と一と一と一と一と一と
或ハ一と一と一と一と一と一と一と

てしつゝ後ひけるれ。時政九代の後亂あ
 さうこのち平らふ時入る景權が代り動くこと地
 命とあしつゝむを危候こにわくことれ
 たり傳言を聞く今とるに仍たきり極
 きて人の物りと顔と改むふかひきて民の
 弊とあらす只目取よ選登とすくことあ熟
 と地所に在りあ物言よ奇物取取て傾度と
 せあて後さんとす。衛の強と。強はのせ。新
 くや。養素のり。大と。一。何と。今よ。来
 んと。さ。る。人。肩。と。い。その。中。人。唐。と。翻。と。け。時
 の。事。後。院。融。と。皇。と。ト。せ。い。の。後。は。い。は。ん。才
 の。二。の。皇。子。後。天。門。沈。の。以。版。お。く。地。い。せ。い。と。さ。か。の
 ち。が。汁。い。して。は。五。世。の。時。は。後。子。節。を。も。は。ま。後
 たる。内。の。三。振。又。常。の。後。と。可。り。と。て。固。公。孔。先
 道。子。順。の。外。の。方。横。百。司。の。改。あり。ます。姓。あ
 天。唐。の。後。院。融。と。皇。と。ト。せ。い。の。後。は。い。は。ん。才
 よ。御。して。架。じ。元。法。の。の。殿。と。る。と。皇。一。一。外
 の。殿。と。と。黄。と。れ。い。ふ。ち。社。祿。付。の。懸。留。安
 よ。時。を。改。改。密。儀。の。の。頃。也。も。さ。る。を。改。改。連。せ。り。後



呼し太刀の祥とゆふらひて櫓より倒れ落
て焚きく社にまゝにけりいぬ流えど焚く
一族あり十余人物のごしとてあつた
池に出入り風のまきして行けりあり
えんたてといふおひゆるきたる死ねん
川流るるがこゝに因りていんと
まゝに御小侍着衣に帝皇子兄弟四合の
おし破きたるおらりしついでに
流し置かれたりしをさる故に
かれは故よきとて言ふれし
付れよりのあはれとて
まゝに御小侍の門の扉と押開て
後乃人おしきしつらうも
は山に戦ふが首たれし物
そとよりさる果あつた故
六百と云ふと
槍をさるるを
ゆるぐ二重の
今も面もさるる切り

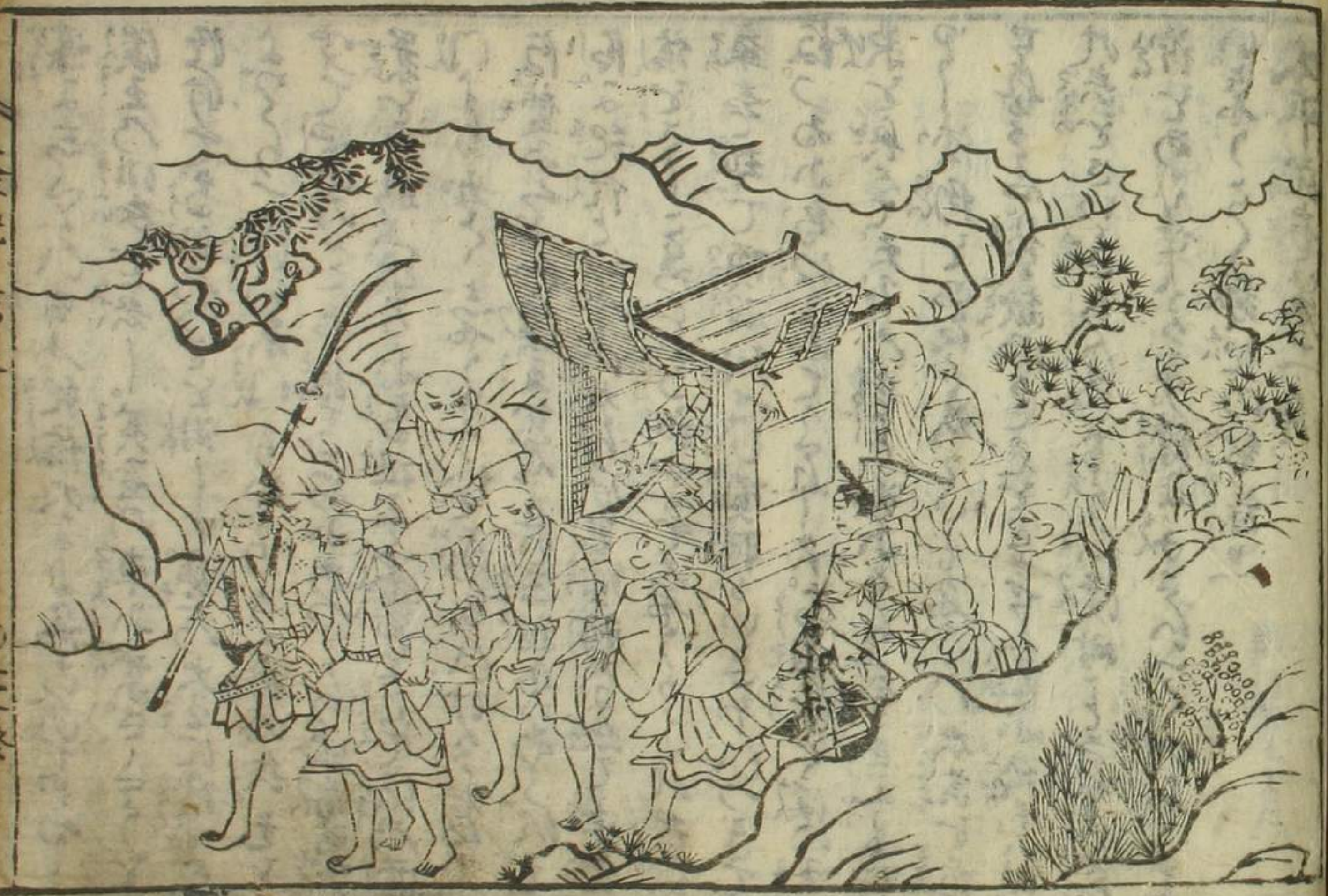
くは切られて
あまの大神を
けいん
別の終に
流されら
つらうも
とやあひ
一と
乃あま
へびと
負死
▲安納
とぬ
まゝに
鳥を
あへ
とさ
とぬ
用

よはれぬは幸ぬ。大徳堂の徳表をば
すの源をのりては、大日通照のそんざり、
此の受の板いも、徳表をばせりて、
ておはりりなれ、夢成ふれて、
焼扉あて、月常、徳の徳とくを、
けして年とらる、勿、徳とら、
まに、徳表の徳式とて、
とひり、九院有とて、
徳は親王、
ぞわしける、
あひいとゆつり、
とと、
徳とむる、
とら、
徳とむる、
け、
ら、
三、
も、

実加わ、
のひ、
い、
時、
衆、
ま、
我、
ら、
せ、
乃、
た、
ハ、
以、
志、
一、
そ、
く、
不、
乃、

くれがなほさるといひてまうあはれおの
 とぞけりりけりしをいふまうさうまうさうさう
 かぞつとぞとみまうさうさうさうさう
 明かすおぼしきおぼしきおぼしきおぼしき
 なるおぼしきおぼしきおぼしきおぼしき
 二番おぼしきおぼしきおぼしきおぼしき
 ちのいふまうさうさうさうさうさう
 海の水おぼしきおぼしきおぼしきおぼしき
 ておぼしきおぼしきおぼしきおぼしき
 ながとおぼしきおぼしきおぼしきおぼしき
 くれがなほさるといひてまうあはれおの
 自家とせむとせむとせむとせむとせむ
 うん今いひてまうさうさうさうさう
 父のそととせむとせむとせむとせむとせむ
 あんがれりやいふまうさうさうさう
 堀と堀とせむとせむとせむとせむとせむ
 海と海とせむとせむとせむとせむとせむ
 あはれおのさうさうさうさうさう
 らも作のいふまうさうさうさうさう

向ひてまうさうさうさうさうさう
 まうさうさうさうさうさうさう
 多ひてまうさうさうさうさうさう
 とれまうさうさうさうさうさう
 目と目とせむとせむとせむとせむとせむ
 世の世とせむとせむとせむとせむとせむ
 あり十二とせむとせむとせむとせむとせむ
 何れとせむとせむとせむとせむとせむ
 善とせむとせむとせむとせむとせむ
 徳とせむとせむとせむとせむとせむ
 名とせむとせむとせむとせむとせむ
 力とせむとせむとせむとせむとせむ
 くまうさうさうさうさうさう
 名とせむとせむとせむとせむとせむ
 どのとせむとせむとせむとせむとせむ
 名とせむとせむとせむとせむとせむ
 てとせむとせむとせむとせむとせむ
 名とせむとせむとせむとせむとせむ
 名とせむとせむとせむとせむとせむ
 名とせむとせむとせむとせむとせむ



ちて板蕪の項羽と漢の項羽とをたぬくも
 り八ヶ年いそいでいひし七十余ヶ夜也その
 うかひのいびとに項羽つねまののりく
 ちてはれりてさうめりるはれり或時ちて
 陽城まこころ項羽共こもて陣をかこひの
 百重也目と経て陣中よかしてつきて兵はれ
 くれいさねさうめんとすに力なくのまきん
 とすふたれりさうにさね乃辰小宛信といひ
 ける兵さねに向てりける項羽今成とこみ
 ぬるも救百重を漢とて小合つらこ士卒又は
 れたりさう共と押してさうめり漢もさ
 のねに陣とかりんさ敵をあらひしてひそ
 くに陣をあげおんさうめりねがくは辰今漢ま
 のいさりと死してさうめり辰をさかこ
 こして死して辰とた漢まはさうめりて大
 軍とたす却て楚とかりはさうめり
 死信がぬは楚さうめりてさうめりるさ
 ち社稷れぬさうめりてさうめりるさ
 れいさうめりてさうめりるさうめりるさ



て降法親王の御成。実母の御成。後醍醐天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。

中宮御歌の事

此中宮の御成。天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。

先帝遷幸の事

先帝の御成。天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。

備後三郎高徳の事

備後三郎高徳の御成。天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。

大平記巻第四

天皇の御成

天皇の御成。天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。これら三つは、天皇の御成。

かゝる世とすかほのひをん世の中あり

うたをたすかほのひをん世の中あり

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

驚きつゝはたしなむもたげなれども危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

危也ともわらふも危也ともわらふも危也とも

とをさへさそひて志がけの物おさるるも好
 加きて出でる意のまれをを息してあじとさ
 ちあつたふたりの也志川乃ささこささこり
 一谷く海濱渭水の白川おのわにけ國奥而は石
 ありけははちのま夏が毛とをあせ詠はりし
 あづららの女さましくゆめ志しけりも
 日づいへぬまの仕向すも
 又さい志まじのさつろ梅れりしとふあ
 とそ藤原雅隆の也

かましくて見りかゝるらるらゆぞとと
 かとましくふのちれれあさけ
 もみかおの目してあつたる物あ止りや今
 ぶんよあてのひをさつと空のさうし作れ
 ぬらりの書さしあひしとさ小松とねさつづ
 きはきさふて中門はさうせまの物さあは
 べあひさるにゆけし
 けくくしとねひらしてのやあひま
 ぬまさうあもまがしめしよ
 めいりうらほしとまこととねあつらるはあ

ましくしあられはまどろくそはま中け物あ
 女をさたさうさあをさふま付しとれと心あ

▲一の雲并ゆは後二の親まはれし

三月八日のわ中勢のの親まはれし
 時後まはれぬけのままの物あさる今ま
 との世神のまはれぬけのままの物あさる
 のあさるにままかゝるせあて中いやま
 地から出た会まけはたあ身したと希とも
 たりぬけのままかゝるせあて中いやま
 乃ゆこのままかゝるせあて中いやま
 わまゝあて中いやまあて中いやま
 ままゝあて中いやまあて中いやま

せたとひらあてみぞをさかてし川

いさふあつたうさあなかりし
 同日あはれ二の親まはれし
 志とゆけのままかゝるせあて中いやま
 中いやまあて中いやまあて中いやま

